

2020 年度

岡山大学大学院保健学研究科

博士学位申請論文

内容要旨

看護学分野

齋藤 信也 教授 指導

上山 和子

2020 年 6 月提出

内 容 目 次

主 論 文

- 病児保育（クリニック併設型）における家庭療養（Home Care）への
看護実践と支援の実態に関する研究—全国調査から—
上山和子、小田 慈、齋藤 信也
小児保健研究 79(3) 234-241 2020

副 論 文

- 題 名 : 小児外来における看護ケアと支援に関する研究の動向
上山 和子
インターナショナル Nursing Care Research 12 (1) 191-198 2013
- 題 名 : 小児看護学における外来実習の学習成果の分析
—小児の観察状況と外来看護の役割に焦点を当てて—
上山 和子
インターナショナル Nursing Care Research 10 (4) 117-125 2011

参 考 論 文

- 題 名 : 小児看護学実習に導入したプリパレーションツールを活用した教育方法
とその学習成果
上山和子、山本裕子、西村美紗希、小田 慈
新見公立大学紀要 40 59-63 2019
- 題名 : 小児看護学における「子育てカレッジ実習」に導入した健康教育に関する
教育効果
上山和子、山本裕子、小田 慈
新見公立大学紀要 39 59-63 2018
- 題 名 : 対象の健康レベルの違いによる小児看護学実習の学習内容の分析と
構造化—病院実習と学校保健室実習の学習内容の検討—
上山和子・木下香織
日本小児看護研究学会誌 8(2) 73-78 1999

主 論 文

病児保育（クリニック併設型）における家庭療養（Home Care）への 看護実践と支援の実態に関する研究—全国調査から—

[緒言]

健康を一時的に逸脱した子どもに対する子育て支援の一つである病児保育は、一般的に上気道疾患などの急性期疾患や感染症を対象にしており、保護者は、状況に応じて活用している。このような状態に陥ったときの家族のストレスは大きく、子どもが普段の健康状態を逸脱した場合の体制と家庭療養に向けた支援の検討が必要である。本研究では、病児保育（クリニック併設型）に関わる看護職の実践内容を全国調査によって明らかにし、病児保育を活用した家庭療養の看護支援への示唆を得ることを目的とした。

[方法]

I. 用語の定義

病児保育とは：児童福祉法第6条の3第13項によれば、保育を必要とする乳児、幼児又は保護者の労働もしくは疾病その他の事由により、家庭において保育を受けることが困難となった小学校に就学している児童であつて、疾病にかかっているものについて、保育所、認定こども園、病院、診療所その他厚生労働省令で定める施設において、保育事業を行うことをいう。ここでは、クリニック併設型で行われている病児保育とする。

II. 研究概念枠組み

本研究では、インタビュー調査で病児保育に関わる看護職の役割を明らかにし、その結果を基に調査項目を検討した。作成した質問紙を用いて全国調査を行い、病児保育に関わる看護職の実践内容として病児保育に必要なコミュニケーションを心掛け、看護職としての観察力を用いて療養に必要な環境調整を行い、家庭療養に向けた指導が行われているとして仮説モデルを立て、検証した。

III. 研究方法

1. 質問紙作成のための病児保育（クリニック併設型）看護実践内容のインタビュー調査

小児外来で実施されている病児保育（クリニック併設型）の看護実践内容を質的記述的な方法で明らかにするため、中国地方の病児保育（クリニック併設型）施設に勤務する看護職8名にインタビュー調査を実施した。その結果、看護職の背景として、小児病棟での経験は少ないものの小児外来での経験を通して指導していることが明らかになった。

また、看護職の役割としては、感染症による療養部屋の管理を行い、水分摂取の方法、薬の服用方法など家庭での療養方法について指導していることが明らかになった。インタビュー調査で明らかになった内容を基に病児保育（クリニック併設型）における看護実践と支援の実態を明らかにするために質問紙を作成し、全国調査を実施した。

2. 病児保育（クリニック併設型）に関わる看護職の看護実践と支援の実態調査

1) データ収集方法：横断的調査研究として、全国病児保育協議会加盟施設一覧表の HP より抽出した全国のクリニック併設型で病児保育を実施している施設長宛に調査の目的・調査方法を明記した文書と調査用紙を郵送し、担当する看護職に配布を依頼した。看護職には、調査への協力の意思について回答後、個別に郵送してもらい回収した。

2) 調査時期：2014年6月

3) 調査内容：病児保育（クリニック併設型）に就業している看護職を対象に、①基本属性、②病児保育における看護職の実践内容および家庭療養に向けた指導内容（4件法）、③病児保育に必要な知識・技術（4件法）、④コミュニケーション・スキルについて質問紙調査を実施した。尚、コミュニケーション・スキル尺度 ENDCORES¹⁾については、作成者の許可を得て使用した。

本尺度は、藤本・大坊（2007）によって作成され、「表現力」「読解力」「自己主張」「他者受容」「関係調整」の5因子20項目からなり、 α 係数は0.68~0.93で、妥当性、信頼性は検証されている。この尺度は、複数開発されてきたコミュニケーション・スキルに関する尺度の内容を包括的に検討し、整理、分類した上で、コミュニケーション・スキルを構成する下位スキル及びそれぞれの尺度作成が行われており、「表現力」「自己主張」は表出系、「読解力」「他者受容」は反応系、「自己統制」「関係調整」は管理系が仮定されており、コミュニケーション・スキルを測定するのに妥当と考えた。

4) 分析方法：データ分析には、統計ソフト SPSS Version19 を用いた。分析方法は、「基本属性」「病児保育における看護職の実践内容および家庭療養に向けた指導内容」「病児保育に必要な知識・技術」については、質問項目別に記述統計で分析した。「病児保育における看護職の実践内容および家庭療養に向けた指導」の項目は確認的因子分析にて妥当性を検証した。コミュニケーション・スキル尺度は、下位項目ごとの得点を算出し分析した。

5) 倫理的配慮

尺度の使用については、文書およびメールにて開発者の許可を得た。本研究は岡山大学大学院保健学研究科の倫理審査委員会の承認（承認番号、D13 - 01, D13 - 09）を得て実施した。

[結果]

その結果、302施設に郵送し136人より回答を得た（回収率45.0%）。その内121人分を分析対象とした。施設の特徴として小児科単科のクリニックに併設された施設57.0%、利用年齢は1~3歳が多く93.3%、症状は発熱が最も多かった。看護職の平均経験年数は20.6（ ± 9.4 ）、病児保育経験年数6.3（ ± 4.4 ）であった。

病児保育の看護職の実践内容では、「子どもの特性に基づいた観察」「子ども・家族とのコミュニケーション」「子ども・家族への家庭療養に向けた指導」「感染症に対応した療養

環境調整」の4つの因子が確認された。

その内訳として、第1因子「子どもの特性に基づいた観察」の因子負荷量0.84～0.34で、第2因子「子ども・家族への家庭療養に向けた指導」の因子負荷量0.91～0.48で、第3因子「子ども・家族とのコミュニケーション」の因子負荷量0.68～0.52で、第4因子「感染症に対応した療養環境調整」の因子負荷量0.53～0.48であった。

病児保育に必要な知識・技術では「救急に関する認識」が高く、コミュニケーション・スキルでは「他者受容」が最も高かった。

[考察]

本研究の調査対象は、医療機関（クリニック）に併設されている病児保育施設を対象とした。その内、小児科単科のクリニックに併設されている施設が57%を占めており、急性期症状を主訴として受診し、そのまま病児保育で預かるという背景として、小児科単科のクリニックが半数以上を占めていたと考える。

病児保育で行われている看護実践の分析と支援では、看護実践内容の確認的因子分析を行った結果、「子どもの特性に基づいた観察」、「子ども・家族への家庭療養に向けた指導」、「子ども・家族とのコミュニケーション」、「感染症に対応した療養環境調整」4因子が確認され、仮説としての看護実践内容が実証されたといえる。

病児保育に関わる看護職は、病児保育室内だけの看護だけでなく、常に家庭療養を見据えた支援を実践していく必要性が重要と考えた。

病児保育に関わる看護職は、子どもの気持ちを読み取り代弁することで子どもが抱えている不安を軽減させ、安心させるような表現方法を習得するなどのコミュニケーション・スキルを高めていく必要性が明らかになった。

[結論]

病児保育に関わる看護職は、子どもの特性を考慮した観察を行い家庭療養に向けた指導を実践していた。さらに看護職の特性として他者受容が高いことが明らかとなった。

病児保育（クリニック併設型）の看護職の実践内容では、「子どもの特性に基づいた観察」「子ども・家族とのコミュニケーション」「子ども・家族への家庭療養に向けた指導」「感染症に対応した療養環境調整」の4つの因子が確認され、家庭療養に向けた保護者への支援が行われ、保護者の不安に応える指導が実践されていた。また、看護職の特性として他者受容が高いことが明らかとなった。

<文献>

- 1) 藤本学・大坊郁夫. コミュニケーションスキル尺度,心理測定尺度集V個人から社会へ<自己・対人関係・価値観>, 東京:サイエンス社, 2016:272-277.